様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０２１７

研究課題名（和文）極小主義による形容詞の項構造と後位修飾構文の派生に関する研究

研究課題名（英文）The Argument Structure of Adjectives and the Derivation of Postnominal Constructions: from a Minimalist Perspective

研究代表者
前澤　大樹（Maezawa, Hiroki）

名古屋大学・文学研究科・研究員

研究者番号：６０５３７１１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、Maezawa (2008)で提示した不連続AP構文(DAPC)の分析の拡張を通して、名詞後位修飾とDAPCに現れる幾つかの形容詞クラスの語彙特性を明らかにすることを目標とした。特にtough形容詞に着目し、tough構文の主語が補文内に由来する可能性を検討した。再構築の事実の検討から、tough主語の繰上げ分析の問題が明らかとなる。本研究では、位相理論から帰結する意味・音韻部門での再統合過程の考察を通して、tough構文では、補文内で基底生成されたNPが、再統合の結果主節で導入されるDの補部として現れると結論した。また、この分析が関係節に於ける再構築にも拡張されることも示した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to further develop Maezawa's (2008) analysis of discontinuous AP constructions (DACPs) to explore the nature of postnominal modification and the lexical properties of several classes that participate in DACPs. Focusing on tough adjectives in particular, I examined the hypothesis that subjects of tough constructions (TCs) originate in their infinitival complements. Close examination of the reconstruction facts, however, revealed the problems with analyses that assume raising of the TC subject from the embedded clause. By examining the "reintegration" process in the semantic and phonological components, which should be required under the phase theory, this study concluded that the NP complement of the null operator generated in the embedded clause appears as the complement of the subject D as a result of reintegration. It was also shown that this analysis could be extended to reconstruction in relative clauses.

研究分野：人文学

キーワード：不連続AP構文　tough構文　関係節　再構築　意味・音韻表示の再統合　位相理論

１．研究開始当初の背景

(1) 生成文法に於ける形容詞修飾構文研究

修飾要素がどのような構造的位置を占め、被修飾要素との間の修飾関係が如何にして確立されるのかという問題は、伝統的に極めて自由に生起すると見做されていた副詞に、夫々分布の制限された幾つかのクラスが見出され、その認可が問われ始めて以来、より本格的に取り組まれるようになった。

特に近年では、機能投射に高度に分節された普遍的な範疇階層を想定する Cartography の接近法の下、修飾要素を機能投射階指定部に位置付ける分析が盛んに試みられている。Cinque (1999)で詳細且つ包括的に展開された副詞の分析は、Laenzlinger (2000)・Scott (2002)等により形容詞に拡張され、名詞を修飾する形容詞は DP 内の何れかの機能主要部により、指定部位置で認可を受けるとの見解が一定の支持を受けるに至っている。しかし、この種の分析が孕む問題も指摘され、特に、(i)限定形容詞の分布と叙述形容詞の選択特性の間に認められる規則的対応関係と、(ii)名詞前位形容詞で A 主要部右の従属要素(補部・右付加詞)が排除されるという「主要部末尾効果」(Escribano (2004))が、ともに原理的説明を得られない点は看過できない。また、Cartography 分析が予測する程厳密に一定した相対語順は、DP 内形容詞間に認められないとの観察もある(Truswell (2009))。

これに代わる有力な分析としては、Abney (1987)に基づき名詞前位形容詞を主要部とするものと、生成文法初期に遡り、Kayne (1994)以来再び追求されてきた、修飾構造を対応する叙述構造から導くものが挙げられる。両者の根本的相違が形容詞と主要部名詞句の間に通常の述語・項関係を認めるか否かにあるとすれば、後者の分析がより有望であるように思われる。前者が原理的に(i)を捉え得ないのに対し、後者は、想定する叙述構造の範疇や派生過程によって、同時に(ii)にも説明を与える余地を有するためである。しばしば主張されるように、2 種類以上の修飾構造を認めることもできるが、例えば den Dikken (2006)は多様な DP 内形容詞を一律に叙述構造から導いており、修飾関係を叙述関係に還元する試みは、更なる追及の価値があるものと考えられる。

(2) 不連続 AP 構文と形容詞クラス

名詞前位形容詞の補部が主要部名詞句に後続して現れる「不連続 AP 構文(DAPC)」の存在とその限られた分布からは、DP 内形容詞の構造的位置について幾つかの示唆が得られる。筆者は Maezawa (2008)で、主要部末尾効果との整合性と、繰上げ形容詞がこの構文に現れる事実に基づき、不連続な語順が、叙述形容詞と平行的な構造に於いて主要部名詞句が形容詞補部内に留まることによって得られると結論した。この分析は、DAPC を許す形容詞が繰上げ述語に限られることを含意する。実際、類似/相違や位置/順序関係を表す similar のような形容詞については、独立の論拠から、叙述構文の主語が補部前置詞句内から繰上がったものと考えるべきことを示した。一方で、同構文に生起する他の形容詞クラスについては準備的考察を行うに止まり、更なる検討を要する。

(3) 極小主義による理論的研究の近年の進展

極小主義に基づく近年の理論的枠組みでは、併合(Merge)によって構築された構造に改変を齎す基本的統語操作として一致(Agree)が提唱され、そこでは φ 素性が中心的な役割を果たすと考えられている(Chomsky (2000, 2001, 2004, 2007, 2008)。節内の一致、特に節主要部と DP の一致に関しては、当初より活発な議論がなされ、或る程度共通の認識が得られているが、DP 内部の一致操作については更なる検討を要する点が多く、意見の大きく分かれるところである。特に、DP の φ 素性を構成する人称・数・性素性の値がそれぞれ DP 内の異なる主要部に由来するとの主張に従えば(Ritter (1991)・Carstens (2000)等)、DP の派生は φ 素性の部分的一致による値付与を伴うことになる。かかる一致を律する原理が如何なるもので、また D の φ 素性への値の集約が具体的にどのような過程を経て達成されるのかについては、未だ明らかでないところが大きい。

筆者が取り組んできた形容詞修飾構文の分析に於いても、上記の DP の派生に関する問題は大きな意味を持つ。DP 内形容詞は DP の内部構造中に位置づけられ、形容詞の示す一致はその φ 素性が DP 内部の一致操作に参与することで得られるからである。

２．研究の目的

(1) DAPC 分析の拡張と精緻化

本研究計画が起点とする目的は、Maezawa (2008)で提案した DAPC の分析の妥当性をより広い範囲で検証し、それを通じて修正・拡張を施すことで、より一般性が高く精緻な DAPC の分析を構築することである。以下(1)に述べる DAPC 分析の拡充という目的は、本研究進行上の指針をなすものではあるが、寧ろその達成を目指す中で、(2)-(4)に見るより一般的な問題に対し、新たな見地からの結論が得られることを期待するものである。

①他の形容詞クラスへの分析の拡張

上記拙稿の段階では、繰上げ形容詞に基づく分析を similar 類に適用したに止まり、DAPC を許す他の形容詞クラスについては、その存在を認識しながらも、具体的分析を提示するには至らなかった。本研究では、これら他のクラスのうち、主として tough 形容詞と W 類形容詞を扱い、特に分析の中核部分から導かれる「繰上げ形容詞のみが DAPC を許す」という一般化と整合的な分析の可能性を探る。

②構造・派生過程の明確化と限定詞・数詞の制限の説明

①と平行して、以前の分析では未解明であった連続構文に於ける主要部名詞句繰上げの動機や着地点、主要部名詞句の範疇についても、両形容詞クラスの検討を通して解明を試みる。

また、文献中に散見される観察を DAPC を軸に整理すると、形容詞クラスにより生起する限定詞・数詞に制限のあることが指摘される。ここで扱う tough 形容詞・W 類形容詞の場合、similar 類と同様、DACP で不定冠詞以外の生起をほぼ排除する。この制限は、筆者の分析の下では、主要部名詞句が形容詞補部内に留まり得る条件と解釈できるため、上記の主要部繰上げに関する問題と合わせて考察し、説明を与えることを目標とする。

(2) 特異な形容詞クラスの項構造の解明

(1)-①のように DAPC の分析を他の形容詞クラスに拡張することは、(1)の目標達成に寄与するのみならず、項構造や主要部名詞句の移動に関する観察・検討を通して、当該クラスの叙述構文の統語特性についても少なからず示唆を与える。ここで扱う tough 形容詞・W 類形容詞は、何れもその叙述構文が示す特異性から、構造と派生が長らく議論されてきたクラスである。本研究は、両クラスによる DAPC の分析を通して、対応する叙述構文の分析に於ける問題に迫り、分析の提示を試みる。

(3) DP の派生過程と内部構造の探究

１-(3)に述べたように、DP 内形容詞の構造的位置や一致過程を明らかにする上で依拠すべき、DP の内部構造や派生過程には未だ不明瞭な部分が大きい。従って本研究では、寧ろ DAPC に妥当な分析を与えることにより、DP 内の構造と統語現象の解明に寄与することを目指す。特に、(1)-②で述べた主要部名詞句繰上げの動機と着地点の解明、並びに生起する限定詞・数詞に対する制限の説明を試みる中で、DP を構成する範疇、各主要部が担う素性と確立される一致関係等を探究する。

(4) 理論的貢献

以上の各目的を達成すべく考察・分析を進める中で、より広い帰結を持つ理論的貢献をなすことも目指したい。特に(3)については、DP 内の複数主要部間や主要部・形容詞間の一致関係はφ素性の部分的一致を伴うと考えられ、分析を通して、一致操作の振る舞いにより詳細な定式化を与え得るものと考える。

３．研究の方法

本研究の遂行過程では、比較的初期の段階で進行状況が事前の見通しから大きく外れるに至ったため、当初の計画を大幅に修正して研究目的に対しかなり異なる接近法をとることとなった。以下では、本来予定していた遂行方法を概説し、計画修正の経緯に触れた後、変更後の方法について述べる。

(1) 当初予定の研究の方法

①関連先行文献の収集・検討・まとめ

関連する構文・現象及び理論一般に関する文献を広く収集・通覧する。先行研究に於ける分析や見解を整理・把握の上論点を整理するとともに、考察に資するデータの蓄積と分類も行う。理論的研究については、対象構文の分析に直接関与するもののみならず、枠組みに関する最新の動向を把握しつつ、それらを関連現象の分析への影響及び応用可能性を探る。

収集すべき文献の扱う特定構文・現象としては、tough 構文・W 類形容詞、DP の内部構造、DP 内での焦点化・話題化、DP 内形容詞の構造・一致現象・位置と解釈、関係節の上昇分析、等をが挙げられる。

②調査による新規データの採取・集計・整理

考察・分析に必要だが文献中で得られないデータを採取するため、コーパス検索を行った後、母語話者への聴き取り調査を十分な規模で実施する。

③分析の構築

上記①による考察と②による調査・検証を経つつ方向性を定め、分析を構築する。順序としては、まず tough 形容詞・W 類形容詞による DAPC の分析を提示し、両クラスへの拡張可能性を示した後、得られた結果に基づいて、限定詞・数詞に見られる制限に説明を与える。最後に、主要部繰上げの動機を追及することで、DP の内部構造と派生に関する提案を行う。

④論文・研究発表の形への纏め

以上の各作業を行いつつ適宜執筆を進め、論文や研究発表の形に纏めて投稿・応募を行い、得られた成果の公表を図る。

(2) 計画変更の経緯

データ収集調査に於いて幾つかの点で困難があり、専ら新規データの採取・集計に基づき検証を予定していた部分で進捗に問題が生じた。これには、DAPC に生起する限定詞・数詞の調査のように、特定の傾向を見出せる結果が得られなかった例、W 類形容詞での再構築可能性のように、確認のための作例自体が困難だった例等が含まれる。また、構想していた 30 人規模の聴き取り調査は、母語話者の確保に難があり、小規模に実施するのみとなった。

(3) 変更点と変更後の方法

(2)の状況から、まず(1)-③に示した分析の順序と方向性を変更することとした。DAPC に関するデータは文献中に求めることが難しいが、tough 構文と W 類形容詞叙述構文、特に前者については、既に豊富且つ多様なデータが提供されている。よって本来の展開計

画と逆に、先ずはこれらの叙述構文の分析に取り組み、得られた知見に基づいて対応するDAPC の検討を行う。続いて、当該 DAPC の示す限定詞・数詞の制限を論じる上では、対応の叙述構文が逆に不特定主語を排除する事実との関連性も探究し、制約の本質を明らかにすることを試みるものとする。

また(1)-②による検証が困難であったり、得られた結果に明白な傾向を見出しがたい部分については、(1)-①の方法によるより広汎且つ詳細な検討を通した手掛かりとなる現象・観察や分析の探索と、理論的考察の追求により補うこととした。

４．研究成果

前述の通り進行計画に修正を加え、接近法を大きく変更したことから、予定と異なる様々な課題にも取り組むこととなった。結果として、２に掲げた当初の目的の幾つかは着手段階に止まり、十分な達成を今後の課題として残した一方で、他のものは見通しと違った形で達成され、更には本来予期していなかった重要な成果を、特に理論面に於いて得ることができた。

(1) tough 構文研究に関する成果

tough 構文研究に於いては、その主語の補文内への再構築効果が観察されることから、主語を補文内の空所位置に移動によって結び付ける tough 移動型の分析が近年再び行われて来ている。しかし Sportiche (2006)等が指摘するように、tough 構文主語の再構築はその NP 補部のみに限られており、移動分析の下では、一方で D 主要部・指定部が何故再構築を許さないのかが問題となる。

本研究は、従来と全く異なる見地から tough 構文の分析を提示し、上記の非対称性に原理立った説明を与えた。つまり tough 構文に於いて、主語 D の補部として現れる NP は、本来補文内の空所位置で空演算子 D の補部として派生に導入されながら、位相単位の転送(Transfer)によって切り離された後、音韻部門に於いて再度全文の表示を組み上げる過程で、本来と異なる D の補部として現れたものだと提案した。本来の主要部を標的とした NP の「再統合」は、空演算子の音韻的空虚性によって音韻部門では阻止されるが、意味部門に於いては許されるため、NP 補部の再構築が可能となる。一方で、tough 構文主語の D 及びその指定部は主節で導入される要素であり、補文内で解釈される余地は無い。

このような転送後の操作に基づく分析は、再構築の事実を捉え得るのみならず、通常の移動とは様々な点で異なる、所謂「tough 移動」の特異性の本質を明らかにするものである。

(2) 再構築現象に関する成果

ここで「再統合(reintegration)」と呼ぶ操作に基づく上述の tough 構文の分析は、様々な構文・現象への応用が期待できるが、本研究では特に関係節への拡張を試み、再構築効果と所謂「項/付加詞の非対称性」の不整合の解決に取り組んだ。よく知られるように、wh 疑問に於ける条件 C の再構築の義務性については、項・付加詞間で違いが見られ、Lebeaux (1988)以来、付加詞は wh 移動適用後に後併合(late merger)され得るとの分析が広く受け入れられている。しかしこの分析は、主要部名詞句の再構築可能性が示唆する関係節の上昇分析との整合性の点で問題がある。上昇分析の下では関係節の併合以前には主要部名詞句も得られず、限定詞－主要部名詞句は構成素を成さないため、関係節のみを後から併合する選択肢自体が存在しない。このことから、関係節に 2 種類の構造を認める分析も多く見られるが、本研究で提案した再統合過程に基づけば、一貫して上昇分析を採りながら後併合の着想を整合的に取り入れた分析が可能となる。即ち、主要部名詞句 NP と関係節 CP は、それぞれ空演算子 D・wh D の補部として導入され、転送によって一旦独立した部分表示となる。ここで、意味部門での主要部 NP の再統合が、主節の wh を標的とし得るとすれば、上昇分析を維持しながら後併合の効果を得ることができる。

また、これら関係節の例を検討する中で、条件 C の義務的再構築の効果を導くためには、意味部門に於いて、量化演算子 D の A コピーを標的とした再統合は当該部分表示の複製を引き起こすと考えるべきことが明らかとなった。

(3) 理論面に於ける成果

極小主義に基づく近年の研究では、統語派生が位相を単位として進行し、構築された構造は位相毎に意味・音韻部門へと転送されるとする位相理論が広く受け入れられている。また、統語構造に基づく意味表示の形成や文の線形化など、統語論と意味論・音韻論とのインタフェイスに関する研究も盛んになされており、そこで位相が果たす役割を扱うものも少なくない。しかし、転送によって位相単位で分割された意味・音韻表示の断片が、如何にして全文の表示へと組み立て直されるのかという問題については、筆者の知る限り、本格的な検討は未だ殆どなされていない。そのような復元操作の必要性は、インタフェイス条件に要請されるのみならず、条件 C や平行性に基づく削除操作の振る舞い等から経験的にも明らかである。転送された表示が適切に結合されることは、一般に自明と見做されているようにも思われるが、本研究では部分表示再統合の具体的過程を検討し、本来とは異なった位置に組み込まれる余地を追求することで、未解決の問題への接近を図った。狭義の統語論から両インタフェイスに至る派生過程の解明に寄与した点に加え、広汎な構文と現象の分析に於いて、再統合に基

づく新たな接近法の可能性を提示した点で、本研究の意義は大きいものと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
① 前澤大樹、「Tough 構文に於ける再構築と意味・音韻表示の再統合」、日本英文学会中部支部第 66 回大会、2014 年 10 月 18 日、中部大学(愛知県名古屋市).

６．研究組織
(1)研究代表者
前澤大樹（Maezawa Hiroki）
名古屋大学文学研究科 博士研究員
研究者番号：60537116